

伝統工芸品

Traditional crafts

大川の木工製品の多くは、機械化された工場で大量生産されています。

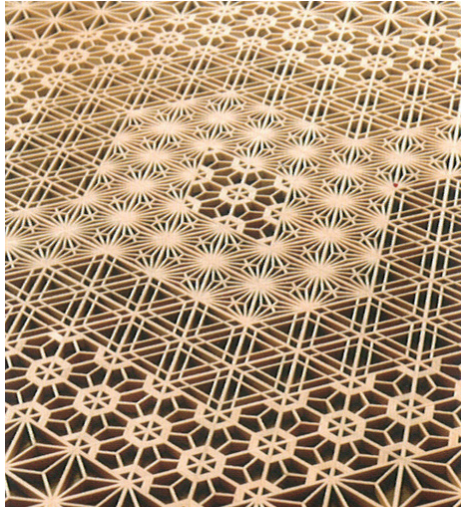
しかし、伝統工芸品も数多く残り、高度な技術を持つ職人たちが伝統の技法を守り、受け継いでいます。

その中でも大川総桐タンス、大川彫刻、大川組子、掛川は、福岡県特産工芸品に指定されています。



大川組子 (福岡県知事指定特産工芸品)

組子とは、釘を使わずに木と木を組みつけて作る建具の技法のひとつ。図柄のパターンは200種類以上にもおよび、現在もこれらを活用して職人が独自に新しい図柄を生み出しています。



大川組子

掛川 (福岡県知事指定特産工芸品) Kakegawa weaving

様々な染色したい草で織った美しい敷物で、筑後花ゴザの中でも最高級品です。盆ゴザ、御前ゴザとも呼ばれています。筑後地方では仏前でも使われるほか、応接間の敷物としても使われています。



掛川織

大川総桐タンス (福岡県知事指定特産工芸品) Okawa Paulownia chest of drawers

桐は湿気と呼ばない、燃えにくい、木目がきれいという特徴があり、高級タンスの素材として古くから愛されてきました。大川の総桐タンスは、外面も内面もすべて桐を使っており、桐タンスの中でも最高級品とされています。



大川総桐タンス

大川建具 Okawa fittings

卓越した伝統に培われた職人の技により、障子、襖、ドア、雨戸などが制作されています。自然の素材を生かす丹念に仕上げた製品は、和の空間を見事に演出します。



大川彫刻 (福岡県知事指定特産工芸品) Okawa sculpture

大川彫刻の代表的なものは、住宅の欄間です。繊細なタッチの透し彫りや、立体的に彫り出した彫刻欄間など高い技術が必要で、筑後地方の神社やお寺、上級武士、大商人の屋敷の欄間などは、榎津や小保の職人が手がけてきました。



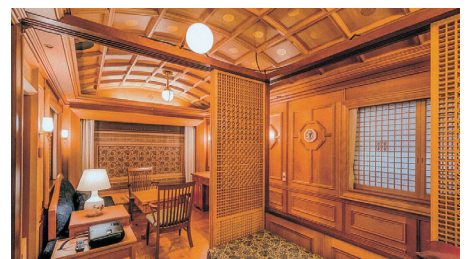
「書院欄間 高砂」(明治中期 作/黒田多吉)

クルーズトレイン「ななつ星in九州」にも

採用された大川組子

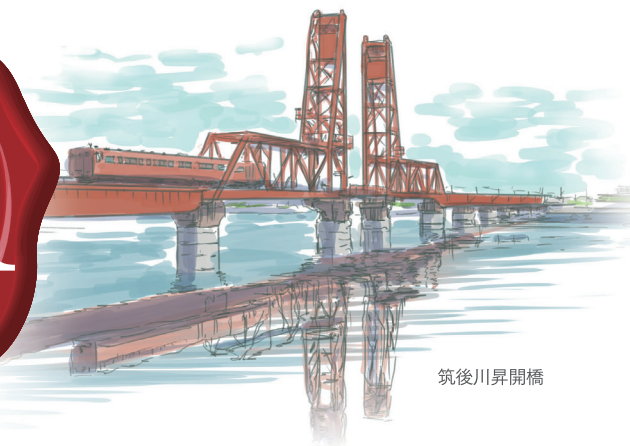
日本初の豪華クルーズトレインとして話題をさらった、JR九州の「ななつ星 in 九州」。その贅と技を尽くした車両の車内

装飾に採用されたのが、大川組子です。伝統ある匠の技術、そして美しいデザイン性で、九州の魅力を車内からもアピールしています。



大川家具の歴史

History of OKAWA Furniture



筑後川昇開橋

せんじんたち わざ こころ う つ かたち か いま つた おおかわ しく にん
 先人達の「技」と「心」を受け継ぎながら、形を変え今に伝える大川の職人たち。

ちくごかわじょうりゅう ひた ざい ぐ しゆせきち おおかわ きい もつこう きじゆつ ぱくく
 筑後川上流にある日田からの材木の集積地であった大川は、その木を活かしながら木工の技術を育ててきました。

むらまち じたい れきし ふなだいく ざいもの ざいもの はこのもの でんとうさんぎやう でんとうきじゆつ も
 室町時代から歴史のなかで、船大工から指物へ、指物から箱物へと伝統産業、伝統技術を持ち、

つね じたい あ げんざい にほんいち かぐ せいさんだか はこちいき
 常に時代に合わせながら現在でも日本一の家具の生産高を誇る地域です。

大川家具作りのはじまり

Q 大川家具の生みの親は誰ですか？

A 木工の祖、榎津久米之介です！



ねん むらまちばくふじゆうにだいにしやうぐん
 1485年、室町幕府十二代将軍、
 あしかがよしはる かしん えのきざとのおとうみのかみ おとうと
 足利義晴の家臣、榎津遠江守の弟
 として生まれる。兄の戦死後、戦乱の
 あに せんしごせんらん
 世を偲んで出家し、京都から大川に
 よはかなしゆつけ きやうと おおかわ
 移り1536年に願蓮寺を建立した。
 ねん がつ さい しき
 1582年10月、96歳で死去。



*大川指物とは？

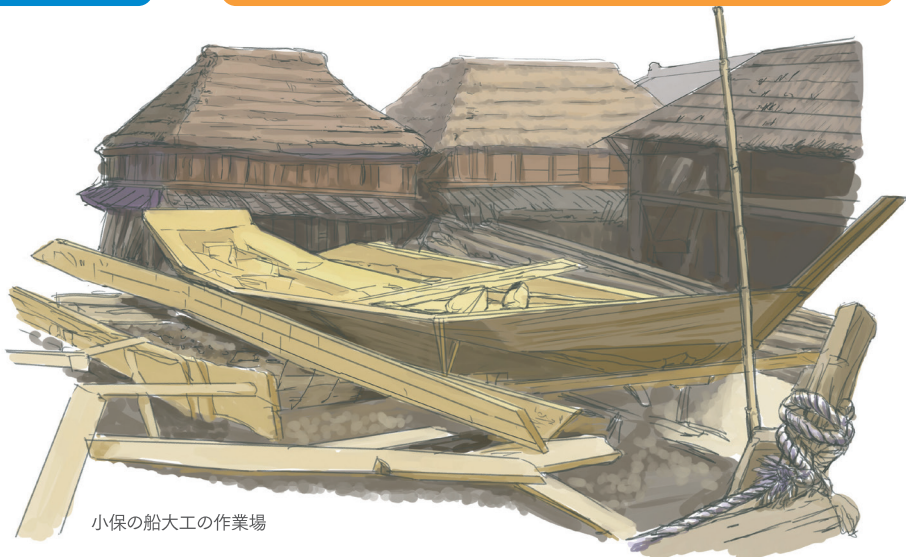
くぎ つか ききく あ つく ちやうどひん なたぐ
 釘などを使わずに、木と木を組み合わせて作った調度品や建具のこと
 つくえ ほん だいいやうてき にほんこらい つた ひしやう たか
 で、机やタンス、箱などが代表的です。日本古来より伝わる非常に高
 きじゆつ げんざい おおかわかぐ でんとう いき
 い技術であり、現在の大川家具にもその伝統が息づいています。

Q 高度な船大工の技術を生かして、生まれたものは？

A 戦国時代に生まれた大川指物です！

戦国時代に生まれた指物文化

おおかわかぐ ほんしやう せんごくじたい
 大川家具の発祥は、戦国時代のま
 だ中である1537年にさかのぼります。木
 こう そえのきづくめ のすけ かしん せいかつ
 工の祖・榎津久米之介が、家臣の生活の
 ために指物を作らせたことが始まりと言
 われ、その中心地が榎津町の庄分であ
 ったことから、大川家具は昭和20年代ま
 えのきづくめ のすけ せん ぶ
 で、榎津指物または榎津モン(物)と呼ば
 れていました。



小保の船大工の作業場

Q 榎津町にはなぜ多くの船大工が住んでいたのでしょうか？

A 有明海と筑後川を航行する船が集まっていたからです！

筑後一の港だった榎津庄分

榎津町には、なぜ多くの船大工が住んでいたのでしょうか。その謎を解く鍵は、有明海と筑後川にあります。当時の物を運ぶ手段で主流だったのは船でした。全国各地の物資が有明海から船で運ばれ、さらに筑後川をさかのぼっていったのです。しかし、筑後川の水深は浅く、海上交通用の大船が航行できるのは榎津一帯まででした。そこで、積み荷を小舟に積み替え、上流にまで運んだのです。そのため榎津は、有明海と筑後川を航行する船が集中する筑後一の港として栄え、また、船の修理や、船造りをする船大工が必要となったのです。

資料によると、

- 1788(天明8)年、船大工67名、大工2名
 - 1854(嘉永7)年、船大工101名、大工41名ほか
- となっており、大工職の多くが船大工であったことがわかります。

高度な船大工の技術

榎津町が木工の町として発展した理由としては、元々、この地には船大工が多く住んでおり、高度な木工技術が受け継がれていたことが挙げられます。また、日田で産出された木材が筑後川を通じて運ばれており、良質な木材が手に入りやすかったことも理由として考えられます。



若津港 若津港(手津屋蔵)

*日吉神社の船御輿

日吉神社の船御輿は、1774年に庄分の船大工たちが造り、奉納したと伝えられるもので、長さ9.2m、幅2m、高さ3m、杉材を使用し漆塗り。昭和38年に福岡県有形民俗文化財に指定されています。釘を一本も使わず、組み立て式になっており、当時の大工技術の高さがうかがえます。昭和40年代までは、毎年5月に船曳き祭りが開催されていましたが、現在は飾り付けをした船神輿の展示、公開という形で祭りを続けています。



船神輿の大きさは長さ9.2m、幅2m、高さ3m、杉材を使用し漆塗り。

大川を翻弄した戦国時代、そして関ヶ原の合戦



Q 関ヶ原の戦いで領地没収された戦国の武将は

A 立花宗茂です！

関ヶ原の火種が大川に

筑後川の河口という地理的条件から、大川市は戦国時代、大友宗麟、龍造寺隆信といった有力戦国大名の勢力争いの舞台となりました。その後、1587年に豊臣秀吉が九州を平定すると、立花宗茂の支配下となります。ところが、天下分け目の戦いと言われた関ヶ原の合戦で、立花氏は西軍に加担したことから改易(領地没収)されることになります。そして筑後一国36万石を支配することになったのが、愛知県の岡崎城主であった田中吉政でした。

*田中吉政の領国経営

田中吉政は積極的な領国経営の中で、数々の土木工事を行います。慶長の本土居の改修工事のほか開拓事業にも精力的で、筑後入国後に道海島、渦島、大野島の開拓を命じ、慶長の本土居完成後には堤防の外側に川口地区の紅粉屋、安本、小保の浜口を開拓しました。このことから、現在の大川市の骨格は田中吉政によって完成されました。さらに、田中吉政が船大工を大事にしていたことがうかがえる資料もあります。榎津船大工の伝右衛門という人が所持していた文書がそれで、2名の船大工の所帯と家屋にかかる税を免除せよという内容です。

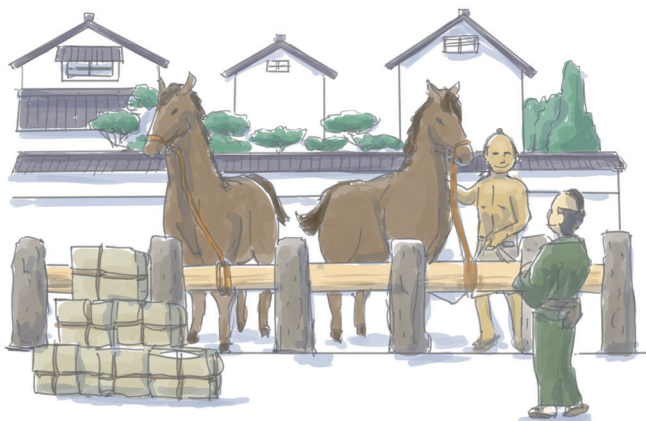


Q 柳河藩小保町と久留米藩榎津町の御境石は何に使われていたのでしょうか？

A 馬継所に利用され、馬10匹が小保と柳川を往来していました。

柳川藩小保町と久留米藩榎津町の御境石

小保町と榎津町の間にある御境石は、ここが柳河藩と久留米藩の境界線だった名残です。馬を乗り換える馬継所も兼ねており、石の中央の穴に丸太を通し、馬をつないでいました。



Q 農業を変えた木工技術は何に活用されたのでしょうか？

A 水車の製造です！

*榎津の大工が筑後の農業を変えた

かんがえだされたのが、当時大阪の淀川で使われていた水車です。苦しい年末完成した水車は、打桶の4倍もの量の水を水田に引き入れることができました。そして、その水車を製造したのが榎津の大工たちでした。元々船大工として高度な木工技術を持っていた榎津の大工が作る水車は性能が良く、大正時代末期に電気灌水機が登場するまで、榎津は水車の産地として栄えました。

猪口万右衛門のより改良された水車。筑後の農家ではよく見られた光景です。

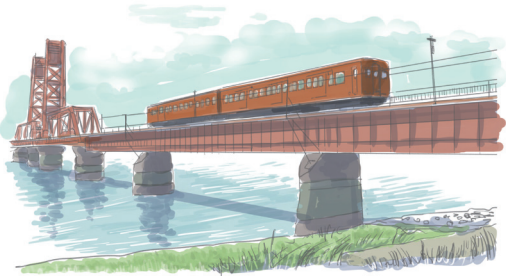


第一回木工祭が始まる

大川家具の歴史Q&A
History of OKAWA Furniture

Q 第1回の木工祭は、いつ、どこで開催されたでしょう？

A 昭和24年大川小学校で開催されました。



昇開橋を運行中の佐賀線車両
昭和62年廃止



大川小学校で開催されていた頃の木工祭

大川に空前の木工ブームが到来しました

重要木工集団地となる

昭和20年8月15日、日本の敗戦により太平洋戦争は終わりました。日本の主要都市は空襲で焼け野原となり壊滅状態でしたが、復興のためには家、そして家具が必要となります。そのような時代の中で大川の家具は需要が高まり、作っては

売れるという木工ブームが到来しました。小規模な木工所が次々とでき、昭和24年になると国から重要木工集団地に指定され、第一回木工祭が大川小学校で開催されました。

*機械化の本格化

昭和20年以前は、機械を導入した工場は数軒しかなかったと言われていたが、戦後の家具需要の増大に伴い、カッター、手押し鉋、自動鉋、角ノミといった木工機械を使い始める工場が増えました。この4つの機械は木工一式と呼ばれ、従来は完成までにタンスで2~3日、大型タンスともなると5日かかっていたのが、これ

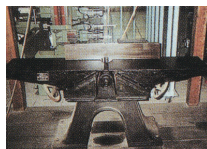
らの機械を使うことで1~3日に短縮できるようになり、このように機械作業が中心になると、家具職人の育て方にも変化が現れてきました。親方に弟子入りして5~6年の修行が必要だった徒弟制度がなくなり、家具工場で働きながら仕事を覚える見習い制度に移行していったのです。



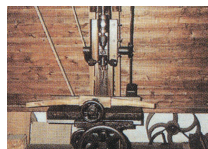
昇降盤



自動鉋



手押し鉋



角ノミ

大川の伝承・伝説

長尾さん塚

三叉地区の下青木に、上杉謙信の父、長尾為景を葬ったという塚があります。この塚は、土を小高く盛り上げてあり、その石段を上がると頂上に為景をまつたという小さな祠があります。為景は九州に下り、この地に住み着き、塚の北西にひっそりと暮らしていたと伝えられています。

北向きの観音さん

北酒見の願船寺の南側に観音堂があります。その堂の御本尊は、等身大の古い木造の観音立像で、両肘が欠け、宝冠(宝石で飾った冠)もない観音さんです。これを「北向きの観音さん」と呼んでいます。この古い観音像は、もと宮内の三角堀に投げ込んであったもので、風浪宮の境内にあった寺の観音像を明治初年の神仏分離のおりに捨てられたものと考えられています。願船寺の住職がこれを知り、ひそかに本堂脇の物置にしまっておきました。

日本一の家具の町へ

Q 昭和30年頃、大川が全国に知られるようになったきっかけは？

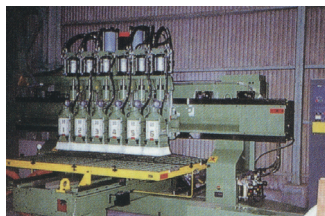
A 工芸デザイナー河内諒によって生み出された引き手なしタンスです。

全国への進出

戦後復興の需要で急速に成長を続けた大川家具ですが、販売エリアは西日本に留まっていた。それが昭和30年頃、一気にその名を全国に知られます。きっかけとなったのは、工芸デザイナー河内諒の指導によって昭和27年に生み出された引き手なしタンスです。都会的で洗練されたデザインの引き手なしタンスは、昭和30年、大阪の西日本物産展で最高賞を受賞し、さらに東京の東急百貨店で開催された第一回全国優良家具展でも高く評価されました。そして全国から注文が相次ぐようになり、大川家具は「大川調」という名で呼ばれるようになり、昭和38年には大川家具工業組合が設立。昭和35年頃から始まった高度経済成長に合わせ、東京、大阪を始めとした大都市に進出し、「家具の町大川」の名が広まっていきました。



大川家具工業団地



コンピュータ制御の木工作機械

*工芸デザイナー 河内 諒

戦後、大川家具が地場産業として発展するためには、昔ながらの箱物にとらわれない近代的な家具へ生まれ変わる必要がありました。その近代化に大きな功績を残した人物が、工芸デザイナーの河内諒です。当時、熊本産業試験場長をしていた河内氏は昭和26年より大川に定住し、デザイン・塗装など、技術の指導や助言を行い、デザインのシンプル化と機能性を追求しました。その結果生み出された「引き手なしタンス」は、都会的なセンス漂うデザインで、大川を代表する家具として爆発的に名声を高めることになりました。



大流行した
引き手なしタンス



Q 大川家具の大量生産を可能にした新技術とは

大量生産を可能にした新技術

全国から注文が来るようになって、それに対応するために大量生産が必要になってきます。その大量生産を可能にしたのが、フラッシュ構造とダボ工法です。フラッシュ構造とは、角材などの芯を格子に組み、その上に合板を貼り付けた板で、1本の材木を無駄なく使える上、軽いという特徴を持っています。また、ダボ工法とは、板と板を組み合わせるための技術で、両方に穴を開け、その中にダボと呼ばれる丸い棒を差し込み接

ベビーブーム世代の婚礼の急増

昭和35年から40年代にかけて、住宅新築の激増と戦後のベビーブーム世代の婚礼の急増で、家具は爆発的に売れました。今では、家具工場にはコンピュータを使った機械も使われるようになり、家具生産はオートメーション化されていきます。

このようにデザイン面でも技術面でも飛躍

A フラッシュ構造とダボ工法です

着剤でくっつけます。これらの技術を取り入れることで、大川では早く安価な家具が作れるようになりました。



人に優しい、環境に優しい快適なインテリア空間の創造

的な成長を遂げた大川家具は、ベビーブームによる結婚や新築フラッシュにより婚礼家具として人気が高まり、順調に生産を伸ばしていきます。昭和46年には全国的にも最大級の大川産業会館が落成し、昭和54年になると生産額1千億円を超える、日本一の家具の町になりました。

大川の伝承・伝説

カチガラス(カササギ)

カササギのことを、勝鳥と呼んでいます。佐賀県では唐鳥、筑後地方では朝鮮半島から来た鳥ということからコウゲガラス(高麗鳥)とも呼んでいます。この地域にカササギが生息するようになったのは、佐賀藩主の鍋島直茂や柳河藩主の立花宗茂が朝鮮出兵の帰りに連れて来て、領内に放したからだといわれています。豊臣秀吉の朝鮮出兵の時に、佐賀藩主や柳河藩主が大勢の侍と朝鮮に渡り、鳥の鳴き声で朝鮮軍に勝つ事ができたので、この鳥を勝鳥と名づけ、持ち帰ったといわれています。このほかに、熊本藩主の加藤清正が朝鮮で兵を進めたとき、カチ、カチと鳴いたこの鳥の声を聞いて、勝利の前兆だと喜び、勝鳥と名づけられたといわれています。

筑後川のエツ

筑後川の特産物であるエツは、長く薄く、葦の葉のようなカタチをした魚です。昔、筑後川の渡し場に一人のみすぼらしい姿をした修行僧がやってきました。川岸に船を着けた船頭に「もしも、川を渡してくださいませんか。」といいました。渡し賃が無いことがわかると船頭は断りました。困ったお坊さんが川岸にたたずんでいると、一人の若者が船を着け、「お乗りなさい。」といって、向こう岸までわたしてやりました。お坊さんが船からあがる時、「ありがとうございました。何かお礼をと思

いしますが、お見掛けの通りこじき坊主です。」と言って、川岸に生えている葦の葉を一枚とって川に流すと、葦の葉が魚となり、夕日に銀の鱗を輝かせ水中に消えていきました。この魚がエツで、若い船頭は、この魚を捕って暮らしを立てるようになり、そのお坊さんは弘法大師であったと伝えられています。



フレームコアフラッシュパネル

合板
格子組
空気孔

ランバーコアフラッシュパネル

合板
鋸目

(昭和50年九州経済白書より作図)

フラッシュ構造 引き手なし家具

河内 諒 設計

フラッシュ構造
枠心を組んでこの表、ウラに単板を張って平らな板面になっている構造

蟻組接ぎ

先端が広がって鳩の尾のようになっているものを蟻といいます。ダブルという機械で作成します。

ダボ接ぎ

5~8ミリの丸棒をダボといいいます。強力な接着剤をつけ、板の穴に差し込み作成します。